

エキスパートに学ぶ 産婦人科縮小手術・低侵襲手術の トピックス

企画者のことば

安彦 郁

手術は、病変を切除したり、低下した機能を再建したりすることで、患者の疾患を治癒へ導き、生活の質(QOL)を改善する重要な治療法です。一方で、手術は侵襲を伴う治療であり、合併症の発生や術後疼痛、回復までに要する身体的・社会的負担を完全に避けることはできません。そのため近年では、従来の治療効果を維持しながら、できる限り患者への負担を減らすことを目指し、内視鏡手術やロボット支援手術の普及、新たな手術機器の開発、術式の改良が進められています。

産婦人科領域においても、良性疾患から悪性腫瘍まで幅広い分野で手術の縮小化・低侵襲化が急速に進んでいます。こうした進歩は、創部の小型化や入院期間の短縮といった利点を生むことに加え、周術期管理や薬物療法との組み合わせ、さらには手術適応の考え方にも影響を与えています。また、妊孕性温存を希望する患者や高齢患者に対する治療選択の幅を広げる点でも、低侵襲手術の役割はますます重要になっています。そのため、手術を専門としない産婦人科医においても、これらの手術の特徴や適応を知っておくことが求められます。

本特集では、産婦人科の手術領域において、特に近年注目されているトピックスを挙げ、それぞれの手術の専門家に、最新の知見をわかりやすく解説していただきました。どの項目においても、ここ数年以内に提唱され始めた新しい考え方を含めていただいています。子宮頸癌の治療においては近年放射線治療の進歩がめざましく、なかでもハイブリッド RALS とよばれる小線源治療は手術といってもよいような手技であり、婦人科腫瘍医は自身で行う手術と並んで、強力な治療手段として知っておく必要があると考え、ハイブリッド RALS についても一項目を設けています。本特集が、読者の皆様の明日からの診療に役立つことを願っています。